

九州工業大学 季刊

九工大通信

Kyushu Institute of Technology

vol.20

2004.4.1

Spring

座談会

国立大学法人化と 九工大の将来について

九州工業大学 下村 輝夫 学長
運営・評価担当 石川 眞澄 理事
教育・情報担当 小林 史典 理事
研究・産学連携担当 松永 守央 理事

研究最前線

脳情報工学の基盤技術を 目指す海馬記憶モデル

生命体工学研究科 脳情報専攻 林 初男 教授

産学連携

産学連携・共同研究の意義

情報工学部 システム創成情報工学科 小黒 龍一 助教授

大学の目指すもの

本学に知的財産本部を開設しました

研究・産学連携担当 松永 守央 理事

工学研究科機能システム創成工学専攻 コラボレーション・ワークの紹介

大学院工学研究科 機能システム創成工学専攻 小森 望充 教授
中村 英嗣 助教授

お知らせ

▲「脳情報工学の基盤技術を
目指す海馬記憶モデル」
からのイメージイラスト
（「研究最前線」参照）



国立大学法人化と九工大の将来について

◆学生は顧客

国立大学は今月から国立大学法人となりました。学生や教職員には期待と同時に不安も少なくないようです。九工大は組織や運営などがどう変わるのでしょうか。

下村 今後大学は役員会、経営協議会、教育研究評議会の3つで

運営され、学長がすべての議長を務めます。大学は教育機関ですから、教育研究にかかわる現場の先生方とうまく意志疎通を図り、かつリーダースhipを発揮する必要があります。学生に関しては、まず授業料は現行のプラス10%以内と決まっているので、それほど変化はありません。そして今後きちんと考えていきたいのが学生に対するサービスについてです。例えば、教室や食堂、お手洗いをきれいにしたり、福利厚生施設を充実させたりですね。教育や研究面などサービスにもいろいろありますが、学生は顧客という意識を持ち、満足できるサービスを提供することが大切だと思います。

国立大学法人化で大学同士の競争激化が予想され、今まで以

座談会

今月いよいよ国立大学法人化がスタートし、本学も新たな第一歩を踏み出しました。各大学がそれぞれより魅力ある大学を目指してしのぎを削る中、本学も福岡市の天神にサテライトキャンパスを構え、また三菱重工(株)と新技術開発で包括的連携を推進する協定を結ぶなど独自の試みに挑戦しています。そこで今回は、九工大の現状や今後の展望について、学長と3理事に語り合っていました。

(聞き手は溝越明・西日本新聞社論説委員会副委員長)

上に大学の魅力づくりが求められています。3月から福岡市中央区天神の複合商業ビル・イムズにサテライトキャンパスを開設していますが、これは若い人たちに九工大の存在や特色をアピールするねらいがあるのでしょうか。

小林 現在北九州市小倉にサテライトキャンパスがあり、セミナーなどを実施しているのですが、福岡地区でもそれを実施したいと考えています。名前も「kyutechプラザ」としましたし、今までと違う人に興味を持ってもらいたい。イムズならではの新しい



(運営・評価担当)
Ishikawa Masumi
石川 眞澄 理事



(教育・情報担当)
Kobayashi Fuminori
小林 史典 理事



(研究・産学連携担当)
Matsunaga Morio
松永 守央 理事

◆高密度の企業連携

「客層」に期待したいですね。イムズに来る人が、ちよつとでも目にしてくれて「九工大はこんなことをしているんだ。面白そうだな」と思ってくれたらいいなと思います。フロアは専門学校などが入っているところなのですが、そこに入ることが法人化をきっかけにした私たちの「新生」への覚悟でもあるし、戦略でもあると思います。

九工大は1月9日に三菱重工(株)と新技術開発で包括的連携を推進する協定を結びました。共同研究や研究者交流、大学院生の研修まで含めた産学連携は全国的にも珍しいと思います。こうした形の大学と企業との連携をもっと

進めていくのでしょうか。

松永 他企業との間で具体的に進んでいる話もあり、これからも増えていくと思います。大学は単なる研究機関ではなく、社会的なニーズと合致するような研究をすることが大切。名前だけの連携ではなく実質的な連携が必要です。実験を通して、企業の求める人材像に合う学生を育てようとも考えています。大学は少々温室的な感じもありますが、企業は戦場でです。学生は鍛えられてモチベーションも上がる、結果的に企業にもメリットがあるでしょう。

九工大は3つのキャンパスに分散していますが、キャンパス間ネットワーク化でテレビ会議なども可能になっています。3キャンパス間の単位互換をはじめ、学部、学科間の連携強化などにどうやって取り組むつもりですか。

石川 私の所属する生命体工学研究科は、2001年から学生を受け入れ始めたのですが、初年度は校舎がなく、戸畑の工学部、飯塚の情報工学部、さらには若松の他大学の校舎を借りていました。



座談会風景

当然テレビ講義システムを活用しなくてはならない、それによって単位互換や教官の連携が進むようにもなりました。テレビ講義にふさわしい講義のノウハウもできています。キャンパス間の距離も関係なくなり、他大学との距離も関係なく、ということになります。

小林 実際、他の工科系の単科大学や高専との連携も進んでいるところですが、いろいろな大学の先生の講義が受けられるので、例えば工業大ではやや手薄の人文社会系の授業もバラエティ豊かになります。教養教育の充実にもつながりますね。

松永 テレビ講義のシステムは、東京都港区芝浦のキャンパスイノベーションセンター内の九工大のサテライトオフィスでも導入さ

れています。九州に来ていただけない方々の話を聞くチャンスになるのではと期待をしています。

——国立大学法人化で地域との連携や地域貢献への期待も今まで以上に強まると思います。地域社会の要請にどのように応えていくとお考えですか。

松永 大学としては、地域の要望がすぐに入ってくるような対応が求められると思います。そして、



Shimomura Teruo
九州工業大学 下村 輝夫学長

ます。私たちが考える地域というのは、北部九州のことです。その中で福岡県、北九州市、飯塚市はそれぞれ戦略を持っています。例えば飯塚にはIT特区がありますし、北九州市の若松ではロボット機能研究、県としては半導体分野の特化を考えています。その中で、九工大は地域貢献を通して大学としての存在価値を高める必要があると思います。今後、地域とさらに連携を深め、その中から新しい産業が生まれるというのがより望ましい形だと思っています。

◆オンリーワンの大学に

——九工大の将来についてどう考えていらっしゃるのでしょうか。国立大学法人化を機に、20年後、30年後を見据えた長期ビジョンも必要ではないでしょうか。

下村 先程も申し上げた通り、大学はまず教育と研究が重要な柱です。長期的な展望でいえば知の再構築、中・短期的でいえばいろいろなプロジェクトを花咲かせたい。一つの産業を興せるようなプロジェクトをつくりたいと考えています。そしてもちろん財政面、

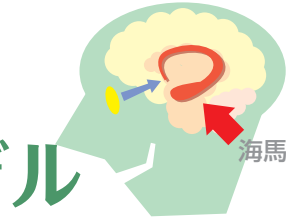
学生サービスの向上、さらにこれまであまり上手でなかった研究内容のアピールなどにも力を入れたいですね。MIT（アメリカ・マサチューセッツ工科大）は世界的に有名ですが、KIT（九工大）も世界で認知されるようにしたいですね。

石川 そのためには、外から見てどういう研究をしているのかわかるようにすることが一つの方向だと思っています。私の夢としては世界トップクラスの研究拠点を学内に数個持ち、世界中の誰もが「九工大でこういう研究をしているんだな」と認識できるようにしたいと考えています。

小林 学生担当の立場から言わせていただくと、求人率をもっと高くしたいです。企業に「九工大の学生なら大丈夫」「九工大の学生をとりたいたい」という意識を定着させたいと思います。日本一企業から求められる大学でありたいですね。

下村 良い意味での日本一、そして日本唯一の個性を持ったオンリーワンの大学を目指していきたい。「大学が変われば日本が変わる」、さらには「九工大が変われば世界が変わる」という形にぜひ持っていきたいですね。

脳情報工学の基盤技術を目指す海馬記憶モデル



Hayashi Hatsuo

生命体工学研究科 脳情報専攻 林 初男 教授

■最先端の研究分野

少し前までは、工学の分野で脳を対象にした研究をしていたと変わり者に見られたものですが今は、工学の分野でも最先端の研究です。このように世の中は変わってきましたが、これは、医学、薬学、生化学、農学、理学などの分野で

脳の研究が著しく進み、脳の機能を模倣した電子回路や集積回路(IC)を作ることが不可能ではなくなったからでしょう。21世紀COEプログラム「生物とロボットが織りなす脳情報工学の世界」(詳細は九工大通信第19号に掲載)も、このような期待の中で採択されたのだと感じています。

脳を構成する神経細胞には、自ら活発に活動するものもあれば、周りのニューロンの活動に影響されて活動するものもあります。そのような脳の活動を脳波で見ると、とても複雑で、脳の中は、パーティに集まった人たちががやがやと話しているようにさえ感じます。私たちは、このような複雑な脳の活動が脳の記憶機能とどう関係しているのかを明らかにしようとしています。研究対象は記憶と密接に関係した海馬と呼ばれる部位です。

■記憶を呼び出す仕組み

まず脳の複雑な活動が脳に蓄えら

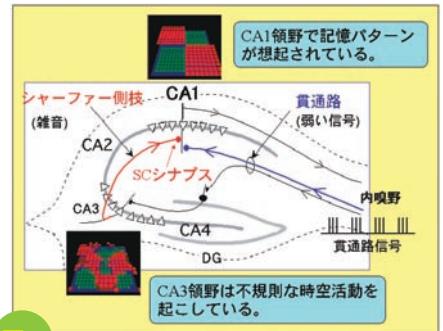


図1 海馬における確率共鳴と記憶パターンの想起

れた記憶を呼び出すのにどのように役立っているかを調べました。

海馬のCA3と呼ばれる領野は、自発的に複雑な活動をしており、海馬のCA1と呼ばれる領野に雑音を送っていると考えることができます。一方、CA1

領野には嗅内皮質から弱い周期的な信号が必要に応じて送られてきます。

この雑音や周期信号はあまり強いものではなく、いずれか一方だけが送られてきても、CA1領野は出力信号をほとんど出しません。しかし、同時に送られてくると、雑音と周期信号が協力し合って、CA1領野から出力信号を出させることができます。これは一般には確率共鳴と呼ばれる現象です(図1)。

CA3領野からCA1領野に送られる雑音の強さは、CA3領野とCA1領野を結ぶ線維連絡(シナプス結合)の強さに比例します。実は、この線維連絡の強さは学習によって強化され、記憶として保持されるものです。そこで、線維連絡が強化された部分で確率共鳴が起こるようにすれば、海馬に蓄えられた記憶をうまく呼び出すことができます。図1は記憶に見立てた簡単なチ

共鳴によって呼び出している様子を示しています。このような記憶想起のアイデアは今までにはなかったものです。

■記憶を保持するには

ところで、ごく最近、スパイク(神経細胞が出すパルス状の信号)のタイミングが合えば、ニューロン間の線維連絡(シナプス結合)を強化でき、高周波で繰り返す刺激は必ずしも必要ではないという結果が報告されました。これがスパイクタイミングに依存したシナプス可塑性(STDP)と呼ばれているものです。

STDPに従うとすれば、自発的に複雑な活動を起こしている神経回路網では、神経細胞間のシナプス結合が常に強められたり弱められたりします。その結果、学習して強化されたシナプス結合は時間とともに変化し、下手をすれば記憶が消えてしまいます。そこで、私たちは、複雑な自発活動を起こしかつ(STDP)に従うシナプスを持つ海馬CA3神経回路網モデルに信号を加え、どのような形で記憶を保持できるかを調べました。その結果、刺激が加わった場所からニューロン活動が同心円状に広がるようになり、刺激がなくなってもこの同心円状の伝播が保持されることを発見しました(図2)。

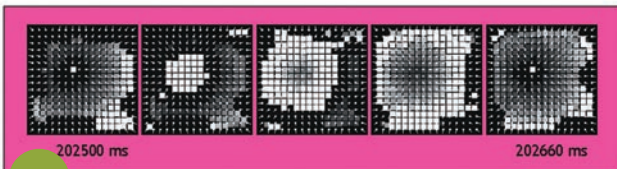


図2 海馬CA3神経回路網に生じたニューロン活動の放射状伝播

あれば、大学と企業の区別がつかなくなってしまうかもしれませんし、必ずしも企業の期待には応えられないかもしれません。力のある企業は技術も物を作る力も持っています。大学の研究室は基礎研究に基づいた新しいアイデアを提供し、それを企業が新しい技術や物として実現すればよいのです。工学といえども、大学は新しい学問や文化を創るところです。大学は知識や発想の宝庫でなければいけないと思っています。

(目印の順番)や出来事の順番を記憶できる海馬モデルができそうです。具体的な内容を述べることは控えていただきますが、現在、ある企業との共同研究として研究を進めています。

■基礎研究の大切さ

これまで私たちは基礎研究を進めてきました。基礎研究は産学連携がしにくいとよく言われます。産学連携だけが大学が生き残る手段ではありませんが、基礎研究をしている人の方がむしろ大学らしい産学連携を進めることができるのではないかと考えています。

産学連携・共同研究の意義

■共同研究での企業側の立場

私は、一般企業に17年在籍しました。本学の助教となつて1年半です。ので、企業の立場で共同研究をしていた期間の方がずっと長いことになりました。そこで、企業側の立場についても説明したいと思います。

「メカトロ・ドライブ系の制御」。これが、私の専門分野です。いかに指令どおりに機械を動作させるか？適切にドライブ装置を駆動するか？が課題です。手法はコンピュータの中で数値演算的に実現されます。機械側は修正に物質的なお金が必要ですが、制御ソフトには不要です。そこで、この分野の企業研究開発者は制御側で無理難題を解決することを求められます。担当者は、直面している問題を解決する制御アルゴリズム（方式）が今すぐ欲しいという立場に置かれています。

■大学側と企業側のすれ違い

大学でこの分野を研究している人間には二つの方向があります。制御的な解法の美しさ・一般性を重視する方向と実物が都合よく動くことを重視する方向です。産業応用という立場をとる研究者は後者ですが、論文を書くためには、美しい解法で現物も上手く動けば嬉しいと言う本音があります。卒論生や大学院生にテーマを与える必要もあります。そこで、即効性より将来性、長く継続できることのできる手法を選ぶことになりまます。大学側に存在する手法は、企業側が必要な手法に贅肉がついた形となります。実際にプログラミンや実験をするのは学生で、教官は手法を把握しているだけという場合も多いのです。企業担当者としては得たい情報が隠れて出てこない状況になります。企業側は具体的な数値



情報工学部
システム創成
情報工学科
Oguro Ryuichi
小黒 龍一 助教授

で書かれ、ソフトの書きやすい形での方式提供を求めます。教官は企業の資料だけ（機械図面だったりする）では現物のイメージがわきません。行列を駆使し一般論を示して、精一杯の協力をしたつもりでいるのです。この不完全燃焼のままで終了してしまふ共同研究が少なくありません。

■役に立った事例

私には、2度ほど産学連携が劇的に役立つ経験があります。一つ目は、制約条件下での8つのフィードバックゲイン決定でした。まともに解くと複雑な数式が現れ、2日徹夜しても解けません。製品導入の説明会は明後日に迫っており、困り果て、恩師に相談しました。恩師は、私の話を聞くこと1時間。その後、ノートを眺め、「これは、ナンヤラ（忘れてました）行列だよ。解けるよ！」と言われ、虚数を導入し、20分ほどで解法を示されました。一つ目は、新製品開発の実現性を納得しない部下の動機付けでした。唯一、実際に物が動いている大学を訪問し、学生が現物を動作させている現場を見せました。彼は帰社後、2週間ほどでなんとか実機を動かしました。

二つの事例は、大学側と担当者の協力と努力の末に製品として結実しました。両方の事例とも、そのものズバリが出たわけではありません。一つ目は話し合いの結果、思いもし

なかつた理論制御が役立ち、二つ目は、とにかく動いている事実が企業研究者を勇気づけたのです。

■共同研究が生み出すもの

研究の種類にもよりますが、私の分野では、そのものズバリが大学に用意されていることはほとんどありません。しかしながら、共同研究で本当に大切なのは、人が育つということにあります。私の知っている成功事例は全て、企業担当者と教官が会話するところから始まっています。そして分担ではなく、一体となつて研究を進めている時期が必ずあります。企業研究者は、大学側にある素材を吟味し、加工し、料理することで能力を高めます。大学研究者は、現実問題と研究成果の関連および意外な応用場面に気づき、研究の幅を広げることが出来ます。更に、共同研究に関わつた学生が、学問の素晴らしさと、学問が製品に変貌していく現場に立ち会うことが出来ます。まさに産学共同で次代の研究開発者を育てていることになるのです。

産学連携は技術的側面ばかりが強調されますが、その真価は産学交流により人が育つという点にあります。技術立国としてのわが国を支えるのは人材です。産学連携は、企業にとつても大学にとつても、最も有効な人材の育成手段と認識することが大切です。



研究・産学連携担当
Matsunaga Morio
松永 守 央 理事

本学に知的財産本部を開設しました

知的財産権とは

知的財産権とは人間の精神的な創作や産業上の識別標識に関する権利を指します。このような難解な表現では何のことが分からないと言われる

うですが、特許とか著作権という言葉が聞かれたことがあると思います。特許等の産業財産権(工業所有権)や著作権がまさに知的財産権です。

最近、新聞などで知的財産という言葉をよく耳にします。青色発光ダイオードの実用技術の開発で著名な中村修二教授が原告となった裁判で、同氏の発明に対して約六百億円という高額(支払額は二百億円)の「相当の対価」が認定されたニュースはご存知だと思います。特許法三十五条には「職務発明(脚注)」に対して貢献に応じた対価を支払うことが規定されています。わが国の企業等の多くは「相当の対価」として僅かな金額を支払っただけでした。今回の判決における金額の妥当性については、多くの疑問の声がありますが、産業界に大きな衝撃を与えたと思います。一方で、最近では知的財産の重要性が見直され、報奨金の上限なし又は数億円レベルを上限とする企業が多くなっています。技術者や研究者を目指す本学の学生諸君にとっては、この傾向はある意味では朗報です。世の中の役に立つヒット商品を「世界で初めて開発」すれば、それなりの対価を得ることができるのですから、頑張っ

てほしいと思います。人生はお金だけではありませんが、努力が報いられて、一社員であつても社長より高給をもらうことができることは励みになります。

経済、地域発展の起爆剤に

二十一世紀は「知の世紀」と言われ、人類の幸福と世界平和のために知の活用が重要となりつつあります。わが国はこれまで知的財産をあまり重要視せず、世界のものづくり大国として資源を輸入して製品を世界に輸出することに奇跡的な高度成長を成し遂げました。バブル崩壊後、米国の再興と中国をはじめとするアジア諸国の成長を横目で見ながら、日本経済は低迷を続けています。わが国は米国の成功を学び、知的財産の重要性を改めて認識して、内閣府に知的財産戦略本部が設置されました。知的財産高等裁判所の新設をはじめとして、国家戦略として知的財産を創出し、保護し、経済の発展につなげることが目標となっています。

大学は知の宝庫です。なぜなら、研究により知を生み出し、教育により知を伝承することが大学の使命だからです。本学にも世界に誇れる教員が多数おり、大学院生や卒研生と日夜研究に没頭しております。社会の要請に合致した教育と研究の実現と質的向上、ならびに教育と研究の成果を活用した社会的貢献が本学の使命と責務です。研究と教育の質を向上することに、本学は地域社会とともに発展し

てきた歴史を有しています。国立大学法人として飛翔するにあたり、北部九州地域から世界に向けて新たな産業分野と新技術の創出を発信し、教育と研究を通して地域と世界に貢献することを本学の中期目標・中期計画でうたっています。本学のこのような姿勢が認められ、文部科学省の大学の知的財産本部整備事業の「特色ある知的財産管理・活用機能支援プログラム」として採択され、昨年十月に知的財産本部を開設しました。

本学は、「技術に堪能なる土君子」の養成を開学以来の校是として、実学重視の伝統を重んじ、社会が求める人材の養成と学術研究の社会への還元を積極的に推進し、世界に貢献することを目指して、

- ① 学術成果を産業界に積極的に技術移転する。
- ② 産業界のニーズに対して柔軟かつ積極的に応答し、大学が保有する知を活用して社会が求める産業分野の構築と技術開発に努める。
- ③ 地域社会の一員として、産学官民の連携を積極的に推進し、社会に開かれた大学として地域経済の繁栄に貢献する。
- ④ 地域における知的財産の創出の中核として、知的財産に基づく地域社会を構築する。
- ⑤ 産業界と連携して先導的工学系人材を育成し、わが国の経済・社会の発展に貢献する。

⑥ 「産学連携」活動を効果的に実現するワンストップサービスの組織を提供する。

⑦ 社会的評価を重視する産学連携活動を推進する。

知的財産の活用を重視

知的財産本部の狙いは、知的財産等を有効に活用して社会に貢献することです。このためには知的財産権の創出、取得、管理、活用を促進する体制を整備することが必要です。職務発明にかかわる知的財産権のうち、本学が保有し対象とするもの(本学に帰属する知的財産を知的財産本部で二元管理して、本学が誇る産学連携機能を活かし、北九州UIC等の技術移転機関と協力して、世の中に役立つよう活用することを目指しています。本学の知的財産本部の特徴は、知的財産に関する経験豊富な企業と契約し、世界に通用する財産とすることを目指していることです。

教職員のみならず学生諸君の知的創造を権利とすることに協力します。お問い合わせは工学部総合研究棟三階の知的財産本部(TEL 093-884-3299)でお受けします。経験豊富なスタッフが応対しますので、遠慮なくお申し出下さい。

(脚注) 職務発明…わかりやすく言うと、給与の支払いの対象となる業務による発明

工学研究科機能システム創成工学専攻 コラボレーション・ワークの紹介



大学院工学研究科 機能システム創成工学専攻
Komori Mochimitsu
小森 望充 教授



大学院工学研究科 機能システム創成工学専攻
Nakamura Hidetsugu
中村 英嗣 助教授

コラボレーション・ワークとは

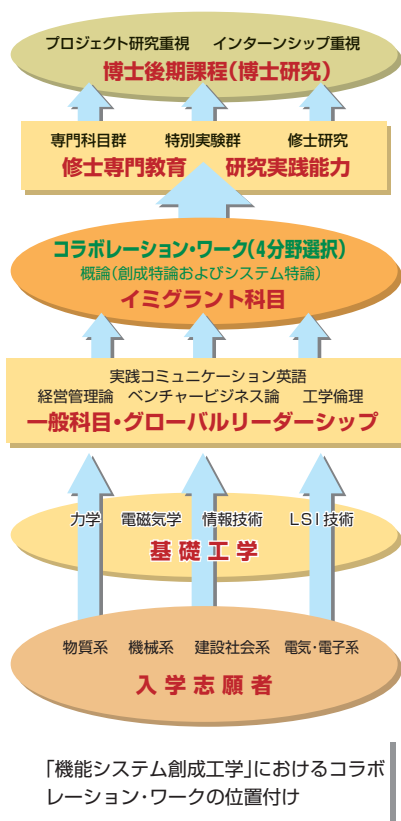
昨年4月、工学研究科に新たに機能システム創成工学専攻が設置されました。本専攻の特徴の一つは、大学院生それぞれが得意とする機械知能工学、建設社会学、電気工学、物質工学などの専門分野を有しつつ、

他の工学分野の基礎知識を

理解した人材を養成することを目的とすることです。このような目的を達成するために、大学院博士前期課程1年次生に大学院生が学部で専攻した科目とは異なる分野を学ぶ科目（イミグランド科目）として「コラボレーション・ワーク」が設けられています。「コラボレーション・ワーク」のもう一つの目的は、産業に関連した課題に取り組みることにより学生の意欲や意識を高めることです。このような目標を達成するための方策として、北九州周辺の企業から「企業テーマ」を頂戴して学生と教官が討議しながら問題解決に取り組むことを行っています。

コラボレーション・ワークの実施状況

「コラボレーション・ワーク」のテーマには、教官が設定した『大学テーマ』と企業からご提案いただいた



本年度は「コラボレーション・ワーク」の初年度ということもあり、『大学テーマ』『企業テーマ』ともに複数テーマを準備しました。『大学テーマ』は各講座ごとに7テーマを準備しました。実施した『大学テーマ』として、「電子回路製作」「ロボットの製作」「デジタル教材作成」「材料の構造解析」「燃料電池」「真空蒸着法による材料作製」などがあります。また、『企業テーマ』を募集するために北九州周辺の約130

社に案内を送付したり、朝日新聞(4月11日)、西日本新聞(10月25日)にも記事を掲載していただきました。その結果、中小企業を中心に大手企業まで多くの提案を頂くことができました。結果的に実施しました『企業テーマ』として「表示システムの高度化」「紙製品の高品質化」「石炭の熱分解」「半導体パッケージの改良」「セラミックスの機械特性評価」「金属粉末の混合技術」などがあります。

コラボレーション・ワークを経験して

「コラボレーション・ワーク」に反映すべく、学生から意見を聞きました。その結果、学生が「コラボレーション・ワーク」を受講して良かったこととして、「他学科の学生との良い意味での共同作業ができた」「企業テーマ」遂行に当たり工場見学は非常に為になった」「自分の専門分野では習わない研究手法や実験手法を勉強できた」「通常の授業や演習より楽しくできた」「企業の必要としている見方、考え方を学ぶことができた」などの意見が出されました。また、問題点として、「専門分野外のテーマ遂行は大変努力が必要であった」「自分の研究時間を削らざるを得なかった」「時間数のわりに単位数が少ない」「毎日朝早いので大変だった」などの意見が出されました。さらに要望として「最初に講義を入れてほしい」「週2回程度で集中的にやってほしい」「全てのテーマを『企業テーマ』にしてほしい」などの意見がありました。以上のように、学生にとって結構好評であったことが分かりました。また、教官側の感想としては「『企業テーマ』が産学連携のきっかけになった」「専門分野の異なる学生も習得可能な内容となるよう努力している」など前向きな意見が多かった反面、「限られた授業時間内で研究成果を出すのは難しい」「異なる専門分野の学生の研究指導は難しい」などの課題が明らかになりました。

最後に、本誌に執筆の機会を与えていただいたことに感謝しますとともに、機能システム創成工学専攻における「コラボレーション・ワーク」の意義をご理解いただき、「企業テーマ」を御提供いただきたいと思います。

お知らせ

三菱重工業(株)と連携協定を締結

本学と三菱重工業(株)技術本部は、このたび新規技術開発に関する包括的な連携推進に関する協定書に調印いたしました。

協定の目的は、本学が有する基礎研究成果(シーズ)と三菱重工業(株)が有する市場(ニーズ)指向の技術経営力を結合し、エネルギー、物流及び情報に係わる新規技術開発の産学連携を推進することにより、先端的かつ広い視野を有する高度技術者の育成に貢献することです。



握手を交わす下村学長(右)と柘植・三菱重工業(株)技術本部長

平成16年度各種講座開講のお知らせ

本学では、平成16年度に次の講座を開講予定です。

皆様のご参加をお待ちしています。

詳細につきましては、本学公式ホームページ(アドレスはページ下参照)でご確認ください。

・地域貢献特別支援事業

本学の教育研究を最大限に活用して、「生涯学習(青少年教育)」「人材育成」「文化」「産学官連携」「国際交流」「地域課題」等の事業を多面的に実施し、地域の教育や文化の向上、地域産業の活性化、地域課題の解決など地域の発展に貢献しています。

・公開講座

地域における生涯学習の機会の一つとして、教育と研究の成果を社会に開放し、生活上、職業上の知識、技術及び一般的教養を身につける学習の機会を提供するため、一般向けの公開講座を開催しています。

・情報技術セミナー

情報工学部は、わが国初の情報系総合学部として、社会に開かれた大学を目指し、急激な情報処理技術の変革に対応できる企業人や一般社会人を育成するため、情報技術セミナーを開講しています。各コースともに、講義と演習を通じて最新の

情報技術を身につけていくことができます。

さらに本学教官との情報交換の場としてもご活用ください。

福岡天神サテライトキャンパス開設

九州一の繁華街で、多くの若者が集まる福岡市中央区天神の複合商業ビル・イムズビル11階に、サテライトキャンパス「kyutechプラザ」を開設しました。

kyutechプラザには、各教官の研究内容や入試情報等を紹介する広報センターを置くほか、情報技術に関する社会人向けセミナーを開講予定にしています。

本学のサテライトキャンパスは、平成12年10月に開設した小倉サテライトキャンパス(北九州市小倉北区A IMビル)に続き2か所目になります。



イムズビル



<http://www.ims.co.jp/ims/access.html>

インキュベーション施設が完成

昨年8月から行われていましたインキュベーション施設(飯塚キャンパス)の建設工事が、完了いたしました。

インキュベーション施設は、産学連携の推進及び本学のシーズを生かしたベンチャー企業育成の場として建設されました。

本施設を利用した大学発ベンチャー企業の創出が期待されます。



インキュベーション施設

平成16年度主要行事予定

(事 項)	(期日または期間)	
春期休業	4/1(木)~4/9(金)	
入学式	4/8(木)	
開学記念日	5/28(金)	
高等学校等との懇談会	7月上旬	
前学期末試験	(戸畑・若松キャンパス)	7/27(火)~8/6(金)
	(飯塚キャンパス)	7/26(月)~8/6(金)
オープンキャンパス(戸畑・飯塚キャンパス)	8月上旬	
夏期休業	8/7(土)~9/15(水)	
工 大 祭	(戸畑キャンパス)	11/19(金)~11/21(日)
	(飯塚キャンパス)	11/12(金)~11/14(日)
冬期休業	12/24(金)~1/6(木)	
学年末試験	(戸畑キャンパス)	2/9(水)~2/23(水)
	(飯塚キャンパス)	2/10(木)~2/23(水)
	(若松キャンパス)	2/9(水)~2/18(金)
卒業式・学位授与式	3/25(金)	

九工大通信では、皆様のご意見・ご感想をお待ちしております。

●宛 先● 九州工業大学総務課企画・広報係

〒804-8550 北九州市戸畑区仙水町1-1 TEL: (093) 884-3007 FAX: (093) 884-3015

メールアドレス: sou-kikaku@jimu.kyutech.ac.jp